
突然変異

後藤詩門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
突然変異

【Nコード】
N9604E

【作者名】
後藤詩門

【あらすじ】
近頃、巷を賑わす凶悪犯……彼の正体は突然変異の怪物だった！

自然とため息が吐いて出る。

今日も夕方の報道番組に例の凶悪犯のニュースが流れたせいだ。
このところ毎日のように、彼の犯罪が取り上げられる。

今回は遂に殺人にまで手を染めたらしい。

何の罪もない老夫婦の自宅に押し入り、食糧や衣類を強奪。
それから、騒いだ二人の首を絞めて殺害したという。

つまりは強盗殺人だ。

我が国の法律では、捕まればまず死刑は免れられない重罪である。
私は、陰鬱な気持ちになりながらテレビのスイッチを切った。

私の名前は山原幸人^{やまはらゆきひと}、遺伝子工学の研究をしている医者だ。

少し自慢して良いのなら、一応この道の権威と呼ばれている者
今、私が手がけているのは染色体レベルの突然変異。分かりやす
く言えば、進化の謎を解明し、今後のより良い進化を促すにはどう
すべきかを考えているといったところ。

そんな私が、巷で話題になっている殺人事件などに何故ため息を
吐いたのか？

むろん、この社会に生きるものとして、悪に対しては誰もが憤る
し悲しみもする。

私の暗い表情も当然といえば当然の反応なのかもしれない。

だが、私の憂鬱な理由はそれだけじゃないのだ。

それは彼が、つまりあの殺人犯が……私の元患者であるからに他
ならない。

彼の名は草薙武^{くさなぎたける}、まだ20歳の若者である。

「山原先生、これから私たち……どうなるのでしょうか？」

顎に手をあて考え込んでいる私に、ちよつとくぐもった声で話しかけてくる者がいた。

振り向くとその声の主は、ベッドに横たわっている若い女性。さもありなん、なぜなら私は彼女の病室にいるのだから。

そこはキンキンに冷えた部屋だった。

夏とはいえ冷やしすぎなくらい冷房を効かせている。

だが……それも無理はない。

なぜなら彼女は顔中包帯だらけなのだから。

蒸れてしまつて仕方がないのだろ。目一杯冷房をきかせても、まだ汗をかいている様子である。

包帯から僅かにのぞくのは両目のみというしまつ。あとの顔のパーツは全て包帯の下なのだ。

見ているだけで暑苦しい。

その上、彼女は暑がりである。

包帯無しでもって室温が25 以上あると狂いそうになると、昔こぼしていた事を思い出した。

さむがりな私はブルツと震えながらもこの部屋の冷氣に耐えるしかない。

その暑がりな彼女が、快適な（彼女にとってはあるが……）部屋でありながら不満そうな様子で私を見ているのだ。

いや、不安そうな言い換えたほうが良いかもしれぬ。

彼女はその顔の包帯からのぞく二つの瞳に、怯えの色を浮かべている。

28カ所におよぶ整形手術を受けたばかりの彼女。包帯が取れるのはあと10日はかかる。

口元も塞がれているので聞き取り辛い、恐らくさっきの声は震えていたに違いない。

そう、彼女は心底恐れているのだ。

彼女も私の患者である。名前は草薙早久夜^{くさなぎさくや}。あの殺人犯の草薙武の……妻であつた。

「大丈夫だよ、君は心配しなくても。私が何とかしてあげるからね。今は術後の経過に影響しないようにゆっくり休んでいたまえ」

私は根拠のない慰めの言葉を彼女にかけた。

しかし、それは嘘なのだ。実際の所は正反対なのである。

状況はますます悪くなる一方。流石の私も頭を悩ませていた。

そんな主治医の内心の動揺に気づいたのであろう。

彼女はなおも不安げな眼差しを私に送っている。

医者として何とかしてあげたいが……今のところは如何ともしがたいのが現状なのである。

それにしても、草薙武は今どこにいるのだろうか？

正直、心配だった。警察に捕まれば死刑は確実である。

それどころか、警察より先にこの国の住民たちに捕まれば、よつてたかつて私刑^{リンチ}に処されるやもしれぬ。

何より彼にこれ以上罪を犯させたくない。

早く我々の手で捕まえなければ。

彼は……病気なのだ！

彼の犯した罪はそのせいである。

彼自身に罪はないと私は信じている。

実は、彼は特定の染色体に異常をきたした突然変異体であつた。いや、子供の頃は全くその兆候はでていない。

ついこの間まで、彼はどこにでもいる普通の青年。

だが……20歳の誕生日と共にその異変は突然にやってきたのだ。

顔は醜く歪み、筋肉は短期間で常人の3倍にまで増してしまふ。

また、異様なほど体毛が生え、骨格すら変わってきた。

その姿はまるで……猿！

我々が進化の過程で捨て去ってきた野蛮な特徴を、彼は見事に取り戻している。

そう、彼は先祖返り。

それも重度の……突然変異。

これまでに、動物のような尻尾が生えていたり、指と指との間に水掻きのようなものがある突然変異体の報告が、私のもとに寄せられたことはある。

稀にだがあり得る症状なのだ。先祖返りというものは……

しかし、彼の場合は酷すぎた。

まるで、全く新しい種が誕生したかのよう。

彼は己の醜く変貌した姿に絶望し、精神を病んでしまふのだ。

そして彼は厳重な警備体制が敷かれているこの病院を簡単に脱走し、今は犯罪を犯しながら行方をくらませている。

何ととっても常人の3倍の筋力を持つ草薙武。警備員も8人ばかり病院送りになった。

ここが病院でまったく良かったというもの。

まっ、冗談はさておき……

彼を捕まえるのは至難の業ということだ。

警察では、そろそろ射殺も考慮しているという。

世論はもう完全にそちらの方向。

ネットなどを覗くと、早く撃ち殺せだとか手榴弾を投げつけるなど過激な書き込みが踊っている。

そして、それだけじゃない……彼と同じく突然変異をきたした者たちは、有無を言わず死刑にすべきとの論調が増しているのだ。

草薙武の犯罪が報道されるたび、その勢いは激しくなる。

恐らく、今度の殺人で……決定的となるだろう。

警察、いや政府も重い腰を上げざるをえない。

彼は今……いや彼だけじゃない。突然変異をその身にまねいてしまった者たちは皆、絶体絶命のピンチに立たされているのだ。

草薙武の妻、早久夜の不安もそこにある。

もちろん、夫の行く末も心配であろう。されど、最近の過激な世論は彼女自身の身をも危うくしている。

彼女もまた、その一人。つまりは……そう、彼女も突然変異体なのだ。

発病したのは武とほぼ同じくらい。

だが彼とは違い、冷静に辛抱強く自分の病氣と向き合っていた。非常に理知的な女性。医者としては嬉しい限りの模範的な患者である。

それだけに、私はなんとしても彼女を助けたいのだ。もちろん、夫の武くんも出来ることなら助けたいと願う。

そして、それはなにも草薙武や早久夜夫妻のためだけという訳じゃない。

私のため……ひいては今後の人類のためでもあるのだ。

実は近頃、僅かではあるがこの二人のような突然変異をきたすものが現れ始めてきている。

これまでにわが国でも12名の事例が報告された。

世界的に見ると1000人は下らないだろう。

遺伝子を研究する者として、興奮を覚える状況である。

これは単なる先祖返りなのだろうか？

いや、それにしても数が多すぎる。

ひよっとするとこれは……進化なのかもしれない！

もちろん、猿のような彼らが我々より進んだ人間とは思いたくない。

知能も我々一般的な人間と比べると、突然変異体はやや劣る傾向があるのも事実だ。

それでも……

進化とは適者生存である。

頭のいい者が生き残るとは限らない。

現に草薙武は生き残っているではないか！

数千人を超える警官隊の包囲をなんなく破り、逃げ延びている。

彼こそ、いや彼らこそ次世代を担う新たな人類やもしれぬ。

科学者として私は確かめてみたい。

それが、人類の未来のためと堅く信じている。

だが……草薙武の犯した罪は拭いようもないのが現実。

本当に困ったものだ。

これは我々にとって極めて重要な岐路。今後の進化を占う重要なファクターとなりうるというのに……

私は心に決めた。

これからすぐに総理大臣に面会を申し込もう。

現職総理は私の大学時代の後輩である。

それに私は遺伝子工学の世界では第一人者。

その私が巷を賑わす突然変異体、草薙武について話がしたいと申し込むのだ。

無碍には断るまい。

そこではつきり申し込もう。

何とか政治的な決着をつけてもらいたいと。彼、いや彼らを殺すのではなく、保護観察すべき存在であると……意見具申するとしよう。

私はこのアイデアをすぐに実行すべく、行動に移すことにした。そして、なおも心配そうな眼差しを送る草薙早久夜に向かってこう言う。

「早久夜さん、私はこれから総理官邸に行ってくるよ。君や武くんのことを頼んであげる。心配しないで待っていていなさい」

私の言葉に彼女はその包帯だらけ顔で、精一杯の喜びの表情を浮かべた。

その瞳にようやく楽しげな色が浮かんできたのだ。
そんな彼女を見てると私もやる気がわいてきた。

そうとも、もし彼女の顔の整形がうまく行けば全ては丸くおさまるのだ。

ようするに草薙武は、己の醜く歪んだ顔を鏡で見て発狂した。

もし、その顔を我々と同じように整えられれば……こんな事態はおこらなかつたはず。

骨格などは多少異なるが、それはおいおい考えよう。
まずは彼女の整形が成功することを願うのみだ。
このことも総理に伝えるとしよう。

さて、もう行かなければ。

私は草薙早久夜のベッド脇に置かれた薄型テレビをヒョイと取り上げた。

そしてそれをクルクルと表彰状でも仕舞うときのように巻き上げる。

テレビを巻きながら、時代の進むのは本当に速いと私は痛感した。私が子供の頃は暑さが1センチもあったテレビが、今では1ミリを切る薄さなのだ。

私は巻き取ったテレビを小脇に抱えながら彼女の病室を後にする。

だが、部屋の扉の所までくると私は思い出したように、きびすを返して振り向いた。

どうしても彼女に言うておかねばならぬ事に気がついたのだ。

私は一言だけ彼女にこう忠告する。

「早久夜さん……私のテレビを勝手に持ち出しちゃだめじゃないか！ これでもう12回目だよ」

「ごめんなさい山原先生、つい癖で」

可愛らしくウインクする彼女を見ると、つい苦笑いが浮かんでしまう。

夫ほど酷くはないが……彼女もまた犯罪者なのだ。

罪状は万引き。

窃盗の常習犯だ。

もちろん、突然変異前はごくごく真面目なお嬢さんだった。

ひょっとして突然変異は人を悪へと駆り立てるのだろうか？

屈託のない彼女の笑顔（包帯から唯一のぞくその目だけで判断したのだが……）を見ながら、私は背筋に冷たいものが走るような気がした。

いや、深くは考えまい。

私は恐ろしい考えを振り切るように彼女から視線を離れた。

「じゃあ、私は行ってくるよ。冷房を効かせすぎて、風邪などひかないようにね」

最後にこんな言葉を残して、私は彼女の病室を出て行った。

私は首相官邸に急いだ。

一応、電話とファックスで面会を申し込んでいるが、返事を待たずに来てしまった。

正直、首相が会ってくれるかどうか心配である。だが、それも杞憂に終わりそうだ。

乗ってきたタクシーから私が降りるとすぐに、官邸の玄関にわざわざ出迎えてくれる後輩の姿を見つけたからだ。

「やあ、福口君……いや、福口総理。この度は突然の訪問にも関わらずお受け下さり、感謝の言葉もございません。本当にありがとうございます」
慇懃な態度で一礼をする私に、首相は気さくに手を振って応じてくれた。

「何をおっしゃいますか、山原先輩。同じ大学の、しかも同じ剣道部の偉大な先輩に……当然ですよこんなこと。それどころか、呼んでいただければこちらから出向きますのに」

明るい口調で語りかけてくる福口総理を見て、私は安堵のため息を吐く。

やあ、彼は総理になっても変わりがない。本当に気さくでいい後輩だ。

私は今後の交渉に希望が持てる思いであつた。

それからすぐに私は彼の執務室に通された。

そこは夢のような空間。大理石の床に、マホガニーの天井。調度品はイタリア製だろうか……

さすがは首相官邸だ。見渡す限り贅をつくした造りである。

私はふかふかのソファ―に腰かけながら、出された上等の玉露と“とらや屋”の羊羹に舌鼓を打った。

うん、うまい！

ようやく人心地つく。

そんなほつとした様子の私を、微笑みながら見ていた福口だったが……急に思いついたように真面目な顔になるところ切り出してきた。

「それで山原先輩、御用のむきはなんでしょう。秘書から聞かされたのは、先輩があゝの殺人犯、草薙武について話したい事があるとのことですが……一体、どういうお話でしょうか？」

ああ、いかんいかん。

私は何をくつろいでおるのだ。

相手は一国の元首だぞ。暇なはずはない。

私は顔を真っ赤にしながら非礼を詫び、これまでの経緯を簡単に話して聞かせた。

「なるほど……要するに先輩がおっしゃりたいのは、あの殺人犯草薙武を精神病患者と同じように罪は問わず、そのかわり嚴重なる保護観察下におけると……そういうことですね？」

彼は素早く要点を理解していた。

私は力強く頷く。

しかし……

「うーむ、難しいなあ」

眉をひそめながら彼はそう呟いたのだ。

「ど、どうしてだ、福口君！」

私は敬語を使うのもわすれて総理大臣に詰め寄る。

これまで非常にいい雰囲気であっただけに、裏切られたという思いであった。

「まあまあ、山原先輩。落ち着いて下さい」

彼は苦笑しながら私をなだめる。

何とか彼につかみかかるのを堪えると、私はもう一度豪奢なソファに座り直した。

私が落ち着くのを見計らって、福口が再び口を開く。

「山原先輩、大変申し訳ない事ですが……間もなく総選挙が控えています。今ここで国民世論を無視した事を私が行えば、私だけでなく党全体に迷惑がかかる。それだけは避けたいのです」

「せ、選挙だって？ 君は人権より票の方が大事なのかね！」

私の絶叫に、彼は苦悩に歪んだ表情で答えた。

「それが政治家なのですよ。大衆が望むものを与える……それが支持率を左右します。そして今、大衆が望んでいるのは、草薙武の極

刑なのです！」

現職総理大臣のこの言葉を聞くに及んで、私はがっくりと肩を落とした。

もう、駄目だ……

理性的でもものの道理がわかると評判の彼ですらこれなのだ。

おそらく他の政治家に頼んだところで無駄であろう。

私は前途に暗雲がたちこめるのを感じていた。

しかし、これで済んだと言う訳ではなかったのだ。

押し黙ってうなだれている私に、この剣道部の後輩はさらなる追い討ちをかける。

「そして、山原先輩には大変申し訳ない事なんですが……草薙武のみならず、彼とおなじような突然変異をきたしたものについても、死刑を宣告すべしと……今日、国会に法案が提出されました」

「な……そんな馬鹿な！ 君が、いや与党が出したのかね、そのよくな馬鹿げた法案？」

「いえ、野党です。彼らも総選挙が近づいて国民世論を味方につけようと必死なのです」

野党までもが……私は舌打ちした。

だが、与党がこの下らない法案を出したのではないのがせめてもの救い。

私はほんの少しだけ安堵する。

現在、与党は参議院でこそ過半数を失っているが、衆議院では三分の二を越す議席を持つ。

例え参議院でこの法案が通ったとしても衆議院で否決すれば良い

のだ。

頭の中でそんな皮算用を素早く行い、愚かにも微笑みを浮かべてしまう。

しかしながら、次の福口の言葉に……私はまたもやどん底に突き落とされてしまうのだった。

「言いにくい事ですが……この法案に、与党も賛成する事が濃厚です」

「ば、馬鹿な！ 何故おめおめと野党の軍門に下る？ 衆議院では議席数で与党の方が勝っているではないか」

「これも同じ理由ですよ、先輩。総選挙が近いからです」

今度こそ、絶望的だ。

草薙武のみならず、その妻早久夜まで……

それだけじゃない、他の何百人もいる突然変異という災厄がその身に降りかかってきた者が死ぬ！

彼らには何の罪もないのに。

自分と少し違うものに対し、安易な気持ちで拒否感を募らせる大衆に、私は反吐が出そうであった。

彼ら自身に、いや彼らの子や孫に、この症状がでるかもしれないとは考えさえしないのか？

私は目の前が真っ暗になるのを感じた。

そんな私を見て福口は、渋めの柿でも口に含んだかのような表情をしている。

彼とて苦汁の決断だったのだろう。少なくとも積極的に望んだ展開ではないはず。

それは次の彼の言葉からも察せられた。

「山原先輩、草薙武の助命は世論の変化なくば難しいとしても……やはり他の突然変異になつてしまった罪なき人々は助けたいと思います。先輩がおっしゃっていた、早久夜という女性の整形手術……それが成功すれば国民世論も変わるかもしれません。私は彼女の包帯が取れる１０日後まで、何とか国会決議を引き延ばします」

「やってくれるか、福口くん」

「やりましょう！」

最後の最後に、僅かではあるが希望の光が見えた気がした。私は内閣総理大臣、福口と固い握手をかわして官邸を後にする。草薙早久夜の手術が成功してますように……そう強く願いながら。

福口首相との面会があつてから１０日後。

今日はいよいよ草薙早久夜の包帯をとる日である。

彼女の手術が成功しているか否かに、全てはかかっているのだから、この日は私にとつても極めて重要な日となつた。

この国にいる１０人を越す突然変異体の人々と、世界中に散らばる１０００人程の彼らの仲間たちの命が……この手術にかかっている。

「山原先生……私、何だか胸が苦しい」

いつも冷静な早久夜も、この時ばかりは緊張しているようだ。私は全ての事情を彼女に語ったわけではない。むしろ内緒にしていた。

されど、患者にテレビを見るなどとは言えない。

彼女はその枕元にある超薄型テレビから、大体の情報を得ているようであった。

もちろん、このテレビは私の部屋から彼女がパクったものである。相変わらずの盗難癖だな……

私は何も言わずに彼女の前に立った。

早久夜はベッドの上に座り、包帯が取り除かれるのを神妙に待っている。

彼女の病室には私の他、この手術に立ち会った医師や看護師数名も、息を呑んで見守っていた。

さあ、いよいよだ。

私はそつと包帯の端に手をかける。

早久夜がビクツと震えた気がした。

累計すると一月余りも包帯をしている計算。

慣れ親しんだものを取り去るというのは、あまり有り難くないものであれ嫌なもののかな？

そんな変な推理を試みる私。

だが、このままにもしておけない。

意を決した私は、一気に彼女の包帯を巻き取った。

そこから出てきたのは、顔中に張り付けられたガーゼの山。

慎重にピンセットでそれらを剥がしていく。

そしてついに、彼女の素顔があらわれたのだ。

その有り様に……私は思わず絶句した。

「せ、先生。どうですか？」

早久夜が声を震わせて私に尋ねる。

失敗した時のため、この部屋からはあらかじめ鏡を取り去ってい

る。彼女にショックを与えたくないためだ。

だから、彼女としては手術が成功しているかどうかは、私に聞いてみる他ない。

しかし、私は返答するのを躊躇っていた。

何故なら手術は……失敗したからである。

彼女の顔は依然として変わることなく、猿顔のまま。

私たちの沈うつな表情から、彼女は己の身に起きている事態を明敏に悟ったらしい。

彼女のその小さな両目から大粒の涙がこみ上げてきた。

声を殺してむせび泣く彼女の姿が、私の目にも辛く映る。

私たちは皆、心の底から嘆き悲しんだのだった。

そして、その時である……

部屋にいる全ての人間（草薙早久夜含む）が泣いているという異様な病室に、一人のインターンの医学生が駆け込んできたのだ。

私たちの様子に最初は驚いていたが、すぐに気を取り直してこう私に報告する。

「山原先生、大変です！ 草薙武が……警察に逮捕されました」

「な、なにに。本当かね？」

「本当のようです。だった今、首相官邸から電話がありました……そして福口首相から伝言です。山原先生にすぐに来て欲しいと。突然変異体の患者の未来にかかわる相談があると」

何てことだ！

ついにあの武が捕まるとは……

それに福口くんの話しとは何だろうか？

希望が持てるものならば良いが……

いや、草薙早久夜の手術が失敗した以上、期待はもてまい。それでも総理の招きを断るわけにはいかない。

私は泣きはらした目を白衣の袖でこすり、官邸へと参上すべく彼女の病室を出ることにした。

早久夜はまだ泣いている。

私は後ろ髪を引かれる思いで病院を去った。

五里霧中、いや漆黒の闇の中を歩くような気持ちで私は首相官邸に到着した。

夢も希望もない。

どうせ福口くんの話しも良いものではあるまい。

私は暗澹たる思いで総理大臣執務室に入室した。

挨拶もそこそこに暗い顔でソファアに座り込む私。

何も喋りたくない気分だった。

でも、何か変だ。

福口の様子が……やけに明るい。

すでに草薙早久夜の手術失敗の報告は彼の耳に届いているはず。それなのに何故？

すると、彼は軽妙な語り口で事のいきさつを教えてくれたのだ。その話を傾聴するうちに、私もこみ出してくる笑いを禁じ得なかった。

なんと官邸で私を待ちかまえていたのは漆黒の闇などでなく……輝かしい光、そう、太陽のような知らせであった。

「ほ、本当かね福口くん？」

年甲斐もなく私は取り乱していた。

それは負の感情ではない。

歓喜による混乱である。

「では、草薙早久夜たちは……あの武も含めて生きていけるのだね？」

「はい、もちろんです！」

この国のトップ、内閣総理大臣の福口も本当に嬉しそうである。事情が変わったのだ。

そう、まさにどんでん返し。

一体何が起きているのかって？

では、詳しく説明するでしょう。

つまり我々は、本当に太陽を見つけたのだ。

もう少しきちんと言えば……長年我々が探してきた我々の太陽系とおなじような星々。人間が住めるような惑星がついに見つかったのだ！

NASAを中心に進められていた銀河系の開拓事業が実った瞬間である。

それが突然変異体の人々と何の関係があるのかって？

それが大ありなのだ。

発見されたこの新しい惑星であるが……ちと困った事に我々が住

むには危険が多い事が分かったそうだ。

それは大気を構成するある一つの気体の濃度が低いという。

そう、二酸化炭素と呼ばれるものがほんの僅かに少ないのだ。

二酸化炭素が大気中に少ないとどうなるか？

二酸化炭素には保温効果がある。つまりそれが少ないということは、惑星全体が……寒いということ。

私だけでなく我々人類一般は寒さに弱い。

この夏の時期でさえ、気温の下がる夜などは風邪をひいてしまうしまつ。

そんな我々がこの星よりさらに寒い星に移り住む事など全くもって無理な話。

ではどうするか？

まあ、我々の科学力で二酸化炭素を増やすのは可能だが、それにはかなりの金がかかる。

ここは、この星を観察しつつ自然と二酸化炭素が増えて惑星全体が温暖化するのを待とう、という話になった。

するとここで……

「実は私がネットに書き込んでみたんですよ。この星を我々の刑務所みたいな存在にしないかと。要するに犯罪者を送り込む島流しですね」

福口がにやりと笑う。

いわゆる情報操作、もしくはプロパガンダを行ったわけだ。

その結果は言わずとされている。

もちろん成功した。

「大衆を操るなんて簡単なものです。あっという間にこの考えは広まり、ついには突然変異体の人間を試しに送り込めという論調に変

わっていきました。いまでは国民世論の8割がこの考えです。今日捕まえた草薙武も含め、彼らをこの新しい星にスペースシャトルで送り出しましょう。突然変異体の彼らにとっては、新しい人生の門出です」

「福口くん……ありがとう！」

私は感極まって涙が流れた。どんな形でも良い。彼らが生きてさえいれば。

私たちはそれから突然変異体の人々を、どのように新しい惑星に送り込むか夜遅くまで話し合った。

それは、本当に楽しい時間だった。

そしてまず、この計画の名称が決まった。

その名は……エデン。

そう、プロジェクト、エデンである。

銀河系の端っこ……

私たちの星から最新型スペースシャトルに乗っても往復100年はかかる距離。

遠い遠い場所に我々は旅立った。

プロジェクト、エデンの実行のため。

先発隊としてまず草薙武と早久夜夫妻が送り込まれる事になった。そして私はその管理者として同行する。

50年後、長い旅を経てようやくたどり着いた。なんて美しい星なんだろう。

まるで水の惑星。

私は一目でその星が気に入った。

早速降り立ってみる。

だが、やはり寒い。

私にとっては極寒の地だ。見栄えは良いが住めたものじゃない。突然変異体の追放場所として選ばれた惑星、言わば流刑地だから当然か……

しかし、草薙武と早久夜にとっては楽園となるに違いない。

彼らは寒さに強いし暑いのは苦手。裸でも大丈夫なくらいだ。

さて、いよいよ彼らをこの星に住ませる計画を実行しよう。

まだ私が本星にいたところ……草薙武と早久夜を送り込むにあたり、様々な取り決めがなされていた。

まず、彼らの記憶の消去である。

私たち人類に悪感情を持ったままにしておく……将来彼らが進化し高い科学技術を持った時に反撃してくるやもしれぬ。

争いの芽は早めに摘んでおこうという配慮だ。

既に二人には以前の記憶はない。

コールドスリープ装置により、すやすやと眠る彼らを大地に置き去りにする私。

起きた時にはお互いの事すらも忘れているはずである。

二人仲良くしてくれるといいが……

さて次に、彼らの寿命についての取り決めがある。

我々、一般的人類は進化を重ねる事によって100000年の命を得た。

だが、彼らは先祖返り。我々のような長寿はない。

長生きするために必要なアミノ酸を自らの体内に作り出せない構造なのである。

よってその寿命はわずかに100年。

これでは流石に可哀想だということ、しばらくの間二人には我々の存在を気づかせることなく必須アミノ酸を分け与える事にしたのだ。

だがこのアミノ酸、作り出すのにかなりの費用がかかる超がつく貴重品。

そこで、この薬を如何に節約しつつ用いれば良いのか計算してみると……50年に一回投与すれば彼らでも1000年ほど生きられる事が分かった。

そこで私はこのアミノ酸を買い集めるだけ集めこの星に持つてきていた。

これだけあれば彼らの曾孫の代までもつであらう。

そして、私たちの存在を気づかせないようにするため、このアミノ酸をこの星にある普通の食用の木の実に似せて形作った。

これを50年に一度、彼らが食するように仕向ける。

草薙武と早久夜が勝手に食べないように、この実は禁断の実に指定することにした。

私の許可なく食べないようきつく言い聞かせるつもりだったのだ。これでまあ大丈夫。

最後に彼らに新しい名前をつけることにした。

その名は、アダムとイヴ。

いい名前だろ？

そして、私は神を名乗る。私の命令に従って生きれば二人は楽しく暮らせるはずである。

これで完璧だった。

そう、私は信じていた……

それから、どうなったかつて？

うーん…… まあそれは草薙武と早久夜、いやアダムとイヴの子孫が残した書物、バイブルというやつを読んでもらえば分かるだろう。まずイヴがその盗難癖を発揮し、いきなりあのアミノ酸入り木の実を全部食べちゃった。

アダムにも幾つか与えたみたいだから、二人は幾分長生きしたけど…… その子孫はもちろん短命になる。
全く何をやってんだ馬鹿。

おまけにあの殺人犯草薙武、改めアダム…… その子孫は彼の血を色濃く受け継ぐ。

いきなり彼の息子のケインは、実の弟アベルを撲殺した。
恐ろしいことだ。

その後も彼らと子孫の歴史は殺戮と盗みの繰り返し。
流石の私も呆れて物も言えないよ。
だけど、一つだけ良かった事もある。

彼らのおかげで最近、かの星に二酸化炭素が急激に増しているのだ。

そして、どんどん温暖化していき、今では寒がちな私たちも住めるくらい。

政府はそのため調査団をちよくちよく送っているらしい。
報告によれば、かなりいいそうだ。

何かの拍子に、私たちの姿を見つけたアダムとイヴの子孫たちは、

私たちをこう呼んでいる。

宇宙人、グレイと……

間もなく政府はかの星へ移民団を派遣する方針だ。

そうすると、あのアダムとイヴの子孫……突然変異体たちはどうするのだろうか？

福口総理はあの星の隣りの惑星、彼らが火星と呼ぶ星に移住させようと提案している。

まあ、それもいいかもしれない。

今の星は彼らにとっては暑すぎる星になってしまったのだから。

火星は寒くて、彼らには気持ち良さそうだ。

来年の夏には……この計画は実行されるかもしれない。

アダムとイヴの子孫の諸君、それまで楽しみにしておきたまえ……

夏の夜、星空を眺めてご覧。

私たちの攻撃型宇宙船が空を埋め尽くすのも、そう遠くないかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9604e/>

突然変異

2011年1月1日13時39分発行